

令和元年度 奈良市立佐保幼稚園 研究実践概要

園長名 山口 善嗣

全園児数 30名

1. 研究主題 「豊かな心でいきいきと活動する幼児の育成」
—幼児の心が動く感動体験を通して—

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

昨今の社会の流れから、家庭では、人との関わりや、限られた生活経験の中で育っている幼児が多い。そこで、幼稚園・家庭・地域が連携をとりながら、様々な人・物・こととふれあい、感動体験を重ねる中で、人とつながる喜びを感じ、いろいろなことに興味や関心を高めながら、意欲的にいきいきと活動する幼児の育成を願い設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

幼児の身近な人や物とのかかわりの中で、豊かな経験ができるよう生活や遊びがより充実する保育の創造に努める。

②研究の重点

- ・研究主題について、昨年の評価をもとに、職員で共通理解を深める。
- ・幼児の現状を把握し、幼児一人一人が自己を発揮できる保育内容や、援助・環境構成の工夫や再構成を行う。
- ・園・家庭・地域・小学校との連携の中で、幼児が意欲をもって活動できる具体的な取組方法を探る。

③活動の方法

異年齢児との関わりの中で

【入園当初】(4歳児 4月)

初めての集団生活で不安な様子が見られた。友達と関わるが、遊び方や関わり方がわからず、友達の遊びをじっと見ていたり、園庭をずっと歩いていたりする幼児もいた。その中で、5歳児が優しく声をかけ、遊びに誘ったり、ルールを教えたりするようになり、遊びから保育室に戻ると「大きい組さんと遊んだよ」「鬼ごっこで大きい組さんと一緒に鬼、したよ」と嬉しそうに話すことが多くなった。また、保育室まで「〇〇君遊ぼう!」「また鬼ごっこしよ」と5歳児の誘いに喜んで園庭で遊ぶようになった。



<反省・評価>

- ・不安な気持ちが5歳児の誘いなどで、安心して遊ぶようになった。
- ・5歳児に教えてもらった遊びをクラスで再現し友達と一緒に楽しむ姿も見られた。
- ・5歳児と一緒に遊ぶ中で、遊具の使い方や片付けの仕方を知り、友達にも教えるなど、自分に自信をもてるようになってきた。

【カバンづくり】（4歳児 10月）

弁当を食べた後、5歳児の保育室へ遊びに行くようになる。ある日「〇〇ちゃんみたいな、つくりたい」とA児が保育室に戻ってきたので、保育者と一緒に5歳児の保育室へ行くと、紙袋を工夫してカバンをつくっていた。近くにいた5歳児が「教えてあげよか」「これ、使うんやで」と材料を持って来てくれた。A児は嬉しそうに材料を受け取る。5歳児は「ここにテープ貼りや」「持っといてあげるわ」と優しく作り方を教えながらA児を手伝った。A児が嬉しそうにカバンを保育室に持ち帰ると「すごい!」「どうやってつくったん?」と興味をもった幼児が集まって来た。A児は「じゃあ一緒につくろう」と、5歳児に教えてもらった事を思い出しながら、友達にもカバンの作り方を教えた。出来上がったカバンに友達も満足し、みんなに見せていた。その後、「お金をつかって、お買い物に行くわ」とカバンにいろいろな物を入れてお買い物ごっこが始まった。

<反省・評価>

- ・4月から5歳児との関わりを多くもってきた事で、日々の遊びの中でも、自然な関わりができ、その中で5歳児への憧れの気持ちが膨らんでいる。
- ・5歳児に教えてもらった事が自分も出来たこと、そして、それを友達から認められたり、友達に教える事が出来たりした事が、自分への自信に繋がり、少しずつ行動範囲や遊びの内容に広がりが見られてきた。

好きな遊びに取り組む中で

【コマ回し】（5歳児 10月～3月）

一学期にレゴブロックを使って遊ぶ中でコマづくりが始まった。回しているうちによく回る形や、回したことで見える色の変化に気付く姿があった。興味が広がることを期待し、投げゴマを用意し、いつでも使えるようにしておいたところ、二学期後半から徐々に挑戦する幼児が増え、回せるまで頑張る姿が見られ始めた。

遊ぶ中で、友達が諦めずに頑張る様子を応援する姿や、出来た事を一緒に喜ぶ姿、回すコツを自分なりの言葉で伝えようとする姿などが見られるようになってきた。また、「次はここで回そう」と目標を共有して、励まし合いながら遊びを進めていくことができた。次第に回す場所の難度が上がっていき、自分の背よりも高い場所や、非常に狭い場所などに挑戦していくこととなった。



また、そのような友達の姿に刺激され、コマ回しに挑戦する幼児も増えていった。回せた子を『コマめいじん』と名付け、表に名前を書いていった。「〇〇くん、回せたんやあ」「見て見て、僕コマめいじんだったで」と嬉しそうに表を見ている姿もあり、意欲を引き出すきっかけとなった。また、ヒモを巻くことについては保育者に頼る姿があり、ヒモも自分で巻ける幼児を『コマおうさま』として、認めていくようにした。

その後、大半の幼児が自分でヒモを巻き、コマを回せるようになっていった。苦手そうに

コマを避けていた幼児も、少しずつ挑戦する姿を見せ始めた。また遊びでは、一人の幼児が「オレのお父さん、コマ手に乗せれんねん」「昔は、技で勝負してたんやって」と話し、技に挑戦し始めたことがきっかけで、回す場所の挑戦から技の挑戦へと変化していった。

<反省・評価>

- ・自分達でより難しく挑戦していく姿を見守り、身近にある物を遊び場の近くに用意しておくことで、遊びに変化が生まれ、もっともっと、と繰り返し取り組む姿に繋がっていた。
- ・サンタに貰う木ゴマだけでなく、鉄芯のコマや缶のコマ、コマ協会認定のコマなど、様々な種類のコマを、時期を見ながら環境として出していくことで、それぞれのコマの特性や回しやすさ、技のしやすさなどに気付くことが出来た。
- ・幼児自身が興味をもったことに対して、保育者も一緒に興味をもち、深めていくことで遊びの幅や展開が広がっていくこととなった。

幼小連携を通して

本園では、小学校の施設へ親しみをもったり、小学校の先生方の顔を知ったり、自身の進学に期待をもったり出来るよう、5歳児を中心に幼小連携を積極的に推進している。幼児の活動として、主なものを下に挙げる。

【4月】 佐保小学校訪問

園外保育（佐保小学校・校庭）

【7月】 七夕集会（佐保小学校・1年生）

あのねの会（佐保小学校校長先生・お話会）

【10月】 運動会予行見学（佐保小学校）

佐保まつり演技試演（佐保小学校・校庭）

【11月】 一緒に遊ぼう（佐保小学校・5年生）

オープンスクール見学（佐保小学校）

あのねの会（佐保川小学校校長先生・お話会）

秋まつり訪問（佐保小学校・1年生）

かけ足納会（佐保小学校・校庭）

【12月】 おもちゃランド訪問（佐保川小学校）

【2月】 あのねの会（佐保小学校校長先生・お話会）

給食見学（佐保小学校・1年生）

一緒に遊ぼう（佐保小学校・5年生）



この他にも様々な園行事に校長先生（主に佐保小）を招待しており、その都度、5歳児が手紙をかいたり、校長室を訪問したりして、関わる機会を多くもっている。また、行事の打ち合わせや連絡会、合同研修会などを通して、園職員と1年担任の先生方で関わる機会をもっている。

<反省・評価>

- ・互いの行事の隙間を縫って交流を進めている為、じっくりゆっくりとはいかないが、少しの間でも関わる事で、幼児は『小学校』という漠然とした存在に親しみを感じつつある。また、5年生との『一緒に遊ぼう』で教えてもらった『はないちもんめ』や『だるまさんが転んだ』、『だるまさんの一日』などの遊びは、園に帰ってから何度も自分達で遊び、楽しむ姿が見られた。なかなか前に出にくかった幼児も、喜んで『だるまさん』のオニになるなど、良い変化もあった。

- ・引き続き、出来る範囲でかかわりをもち、小学校の先生方にも園の取組や幼児の姿について、興味をもってもらうこと自体が大切と考える。一方で、本園は隣接の佐保だけでなく、佐保川地域も通園区域であるが、佐保小学校以外との交流は、距離的な問題もあり、そう頻繁に行えるものではない。『小学校』という大きな括りで捉え、「こんな雰囲気なんだ」「いろんな先生がいる」「お兄さん、お姉さんは優しいな」など、前向きな感覚をもつことを目標に据え、続けていきたい。

5. 研究の成果

幼児の成長や生活のつながりを意識し、日々の小さな感動体験も大切に重ねてきたことで、幼児一人一人が目的をもち、いきいきと活動する姿がたくさん見られるようになった。特に、人との関わりでは、認められたり、優しく関わってもらったりしたことが自信となり、経験や行動の幅を広げ、主体的に活動する姿に繋がってきている。また、友達への思いやりや人と関わる力にも繋がった。

6. 今後の課題

今後も、幼児の生活のつながりを意識しながら、幼児一人一人の内面を探り、援助や環境を大切にしながら、身近な人や物・ことに関わり、いきいきと意欲的に遊びに取り組めるよう、職員同士の連携をとりながら、保育内容の充実に努めていきたい。